

# 第45号 華山会報

令和2年11月11日  
公益財団法人華山会

## 「厚木六勝」と渡辺華山

あつぎ郷土博物館学芸員 山岡裕子



令和2年9月19日から11月8日までの会期で、あつぎ郷土博物館では、「優しい旅びと・渡辺華山展―「厚木六勝」と「游相日記」―」と題し「厚木六勝」の複製等を展示し特別展を開催いたします。この展示会は、古田亮東京藝術大学美術館准教授が、ハーバード美術館で「厚木六勝」を見られ、本市にご連絡いただいたことを契機として企画しました。それまで「厚木六勝」は長年、所在不明とされており、本市では、「幻の厚木六勝」と題し写真を紹介するに留まっていました。

「厚木六勝」は、天保2年（一八三一）9月に弟子の高木梧庵を伴い厚木を訪れた渡辺華山による風景画で、作成経緯、画題が分かる珍しい作品です。華山と厚木で交流した文化人の1人斎藤鐘助が選定した厚木の景勝地を華山に描かせた「厚木六勝」は、厚木市下川入の名士小宮保次郎が残した日誌に「厚木六勝ノ巻物斎藤氏返却ス」（『小宮日誌』明治15年（一八八二）3月11日）と記されているように、明治時代まで斎藤家が所蔵していた様です。ハーバード美術館で「厚木六勝」を実見した古田亮氏によると、画帖であったものを個別に鑑賞できるように台紙に貼り直し改装したとみられ（古田亮「渡辺華山筆 厚木六勝」（『国華』第一四七号）二〇一七年、明治15年に確認された形状とは異なる形で伝来していたようです。

原本の発見によって『小宮日誌』に記された「厚木六勝ノ巻物」が伝来の過程の中でどのような位置付けができるのかなど、新たな調査・研究の課題が多く見えておりますが、まずは、日本初公開となるカラーの「厚木六勝」をご覧いただければと思います。



「仮屋喚渡」



「雨降晴雪」



「菅廟驟雨」



「相河清流」



「熊林暁鶉」



「桐堤賞月」

『全樂堂記伝』(四)  
— 華山伝記の根底テキスト —  
研究会員 別所興一

本書は晩年の華山に人格的に信服していた松岡次郎が、華山の没後、華山の長女可津と結婚する直前に、華山の親戚縁者や地元の古老の訪問調査など自らの見聞に基づいて編集した華山伝記である。

その中で、ある知人が江戸詰めの家老職にあつた華山に対して、次のような質問をした。

「或人伯登(華山の敬称)ニ問曰、我藩勝手不如意ニテ借財夥敷、利息年増相嵩ミ、其上ニ外公用多費、内ハ家中扶助、国元雑用、江戸屋敷諸雑用、道中参勤ノ入用、スベテ収納ニテハ十分ノ一ニモ引足不申。依之年々借財ニテ使用致候故、逆モ復国ナド申事ハ愚。可ナリニモ可参程ノ勝手ニハ百年ノ後トイヘドモ思東ナク存候。先生イカナル御所存有之哉、承度候」

「伯登曰ク、拙者存念ト申ハ更ニ無之、然ラバトテモ可也ニモ被成候ガ無之哉。曰不然、可也ハ勿論、復国ニモ可参候。左様候ハバ御存念無之トハ不被申候。左様ニハ無之、存念有之ガアシク候。

我が藩の財政は苦境にあり、借金が多く、その利息も年々かさむ上に、渉外の出費が多く、藩士の生活援助などの国元雑用金、江戸屋敷の雑用金、参勤交代の経費などを合計すると、藩の収入金の十分の一にも足りない状態です。本年以後も借金で運用することになりますから、「復国」などと申すのは馬鹿げたことです。正常の藩財政に戻るのには、百年後になつても、おぼつかないと思います。この件に関し、華山先生のご所見を承りたいと存じます。

華山は次のように返答した。

「伯登曰ク、拙者存念ト申ハ更ニ無之、然ラバトテモ可也ニモ被成候ガ無之哉。曰不然、可也ハ勿論、復国ニモ可参候。左様候ハバ御存念無之トハ不被申候。左様ニハ無之、存念有之ガアシク候。四斗樽ヲ水桶ニセルニ、日ニ四斗ノ水ハ入可申候。然ルニ此桶穴多ク有之。漏水多キ時ハイクラ水ヲ入候トモ、穴ヲ留メ不申内ハ、入ルモ詮

無之事ハ誰シモ存候事也。

其誰シモ存候通ニ致候ヲ復国ノ基本ト存候。誰シモ知リタル事ヲセズシテ、力マカセニ水入レ候時ハ、益穴大キクナリテ、終ニ満チ候コトハ有之間敷候。依之穴ヲ留メ候斗ニテ何モ小才覚ヲ一塗ニ止メ候テ、不入カヲ出申間敷候トイヘリトゾ」

私には特別に所見と申すほどのものはありません。それなら藩財政がまあまあ程度になるのは、とても無理でしょうか。いや、そんなこととも可能です。藩財政に対する私の見解はあるものの、藩首脳部にとつては悪い内容(悲観的否定的な診断結果)なのです。

例えば、四斗樽に水を貯えようと毎日四斗の水を入れても、穴が多く空いていて漏水が多い場合、いくら水を入れても、穴を留めない限り、無駄な作業になることは、誰しも理解していることです。

その誰しも理解している通りに致すことを、復国の基本とすべきと考

目次

題字「華山会報」元華山会理事  
故小澤耕一氏  
P①「厚木六勝」と渡辺華山  
山岡裕子

P②全樂堂記伝(四)別所興一

P⑥渡辺華山『毛武游記』②②

P⑩四州真景の旅 ⑧

P⑫少年物語渡辺華山  
読書感想文

P⑬公益財団法人華山会

田原市博物館

田原市渥美郷土資料館

からご案内



えます。誰しも理解していることを実行しないで、力任せに水を入れようとする、穴はますます大きくなって、満水にすることはできません。それ故、穴を留めることだけに留意し、特別の小細工をしないでもつばら穴を留めることに集中すれば、力を入れずに流出を防ぐことができるのです。

さらに、華山の当時の言行のようすを次のように説明している。

「国本ヲ務メ、人材ヲ育フコトヲ主トシ、藩士文武修行遊学ヲ願候者ニハ、皆扶持ヲ給シテ其行ニ従事セシメラレシハ、伯登ノ助成セル所トカヤ。何事モ総テ遠謀深慮ヲ主トセリ。公ノ上書下令、又訓諭解説等、毎モ伯登ノ手ニナレリ。

公事繁擾ノ間モ、退職ノ暇ハ書画ヲ展観シ、六法諸展ヲ玩索シ、筆硯ヲ命ジナドシテ心ヲ養ヘリ。又読書ヲ嗜ミテ、常ニ手ニ解事ナカリキ。扱又汎愛シテ人ノ言ヲ雅俗トモニ心ヲ留メテ聞ケルハ、人伯登ト談ズル

事ヲ楽ミ、又其人ト為リヲ慕フテ、王公貴人モ或ハ延キ或ハ訪ヒ、文人武士ハサラナリ僧徒俗人マデ、日々数十人來過シテ晷ヲ移セドモ、嘗テ倦怠ノ気色ナク、故ニ人々争フテ交ルコトヲナセリ。其中ニ道德ヲ尊ビ、義ヲ尚ブ者、博識有志者ヲ擢ンデ、益友トナセリ」

藩政の元締めとして人材の育成を主眼とする立場から、藩士が文武修行に専念したり、他国に遊学したりしたいと願い出た者に対して、すべて生活費を給付して従事させたのは、華山が助成策を講じたからのようです。華山は何事もすべて深慮遠謀を主眼としていたようです。それで、殿様の出す上書下令や訓諭解説などは、いつも華山が代筆したものであったのです。

公務多忙だった期間も、勤務時間外はさまざまな書画を広げて見たり、六種の画法書を熟読玩味したり、文筆に取り組むことに努めたりして心豊かな生活を目ざしていました。また、読書をたしなんで、常に悟り

きることはありませんでした。

華山は広く公平に愛する精神の持ち主で、他人の発言は風雅なものも俗臭ふんぷんたるものも、親切丁寧に耳をかたむけて聞いていましたから、多くの人が華山と談話することを楽しんでいました。

また、華山の人格を慕って、華山宅には大名など高貴な人々が案内されたり、自主的に訪問したりしていました。学者や武士はもちろん、僧侶や信徒などの俗人まで、毎日数十人が華山宅に来て時間を過ごしましたが、これまでに退屈な気分になつて困ったことはありませんでした。それで、人々は競って華山と親交を結ぶようになったのです。

華山はそうした人物の中から、道徳を尊重する人、道理を重んじ筋道を立てる人、博識有志の人を選び出して、益友にしたということです。

このように華山の言行や華山ととり巻く人々の動静を紹介した後、本書はいきなり華山が藩家老職の退職

願書を出すに至った経緯や、願書の内容の紹介に、変容している。退職願書提出以前の出来事で、本書に記述の欠落している史実を、次に紹介したい。

前号において、華山が藩の海防掛としての役目柄、表浜海岸の防備に他藩に先駆けた施策をしてきたことを紹介したが、華山が外敵である西欧列強の情報を収集するために、秘かに幡崎鼎・小関三英・高野長英ら全国屈指の蘭学者と親交を結んでいたことについては、本書はまったく触れていない。また、大藩から持参金付き養子を迎えたために、若隠居として江戸巢鴨に隠棲していた三宅友信に、新たな生きがいとして華山が蘭学研究を勧めたこと、隠居手当てで大量の蘭書を購入させ巢鴨邸で保管させたこと、三英や長英を友信の隠居手当てで雇用させ、幕府や諸藩に先駆けて翻訳させて巢鴨邸を秘密の蘭学研究所に仕立てたことなどについて、まったく言及していない。

天保八年（一八三七）十二月に幕

府代官羽倉外記の伊豆七島巡察計画に随行して天下国家のために役立つ、という「渡海願書」を、同僚の家老に提出して拒絶されたり、伊豆韮山の代官江川英龍や古河藩家老鷹見泉石と親交を結び、海外情報を交換したりしたことの記述も、まったく見られない。



渡海願書 田原市博物館蔵

本書が主に起草された天保十三年（一八四二・四三）頃は、幕府の蘭学統制が最も厳しかった時期（医学と兵学以外の蘭学はタブー）だったから、華山と蘭学との関わりに詳しく触れることはできなかつたのではなからうか。

他方、華山は同じ時期に「鷹見泉石像」「市河米庵像」など肖像画の大作や軽妙な俳画などを描いているが、本書には華山の画作の紹介や論評は、まったく見られない。本書の編者である松岡次郎は、学識豊かな武士だったけれども、絵画鑑賞などの文人趣味は持ち合わせていなかったようである。浮世絵画家のような職業画家は、格下の存在と考えていたようである。

それ故、世評の高い華山の画業にそれなりの敬意を抱いていたものの、松岡が敬慕していたのは、もっぱら士大夫（学識豊かな国家官僚）としての使命感を持って藩政や国政に献身する華山像だったのである。

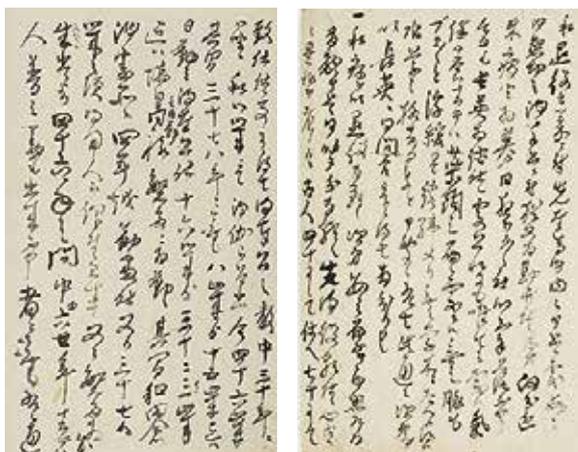
本書『全楽堂記伝』の本文に戻る。「天保十己亥、夏田原ニ役シテ、国事ヲ謀ラシメント内命アリ。其四月疾ヲ以、職ヲ辞セント請フ」

天保十年（一八三九）に華山に対して藩主三宅康直から、この夏に田原に移住し、国家老として活躍してほしい、という内示の辞令が下された。それで、華山は同年四月に病氣理由で藩家老（年寄）職の退職願を藩主に上呈した。

願書は他の家老たちによって却下されたが、華山は一体、なぜ退職願を提出したのであるうか。その最大の理由は、江戸育ちで生涯の大部分を江戸屋敷で居住した華山にとって、生活の拠点を江戸から田原に移すことは、耐えがたい苦痛だったことである。

江戸屋敷の武士の生活を支えているのは、国元の田原の領民の労苦であることを理解し、短期・長期を含めて四回訪問した郷国田原の自然と人情に愛着を感じていた。しかし、江戸から離れることは、家族ともど

もに馴染んでいた大江戸文化の享受を断念するだけでなく、長年かけて築きあげた人脈、江戸在住の文化人仲間のネットワークから隔絶することになる。特に近い将来、多忙な藩務から解放されて、画作や国事に専念したいと考えていた華山にとつては、国家老への転任は何としても避けたかったのである。



退役願書稿 田原市博物館蔵

「退役願書」の提出は、ここでは天保十年（一八三九）四月と記され

ているが、初めてではなく、他の文書によれば、最初の起草は九年正月頃で、一度提出して却下されたものを改稿して再提出したようだ。

次に、「退役願書」の内容を、具体的に検討することにした。

「私退役ノ儀ニ付、先建テ御内々申上候処、段々御懇切ノ御手書ニ付、猶又相勘弁仕候得共、何分近來癩火相募、日夜ワクワク仕、心気落付不申。今日モ長英相談仕候処、イズレニモ唯今ノ処ハ気保養ナラデハ、葉餌ノ届候処ニハ無之、脉モブヨブヨト浮緩ニテ、線緯ベリ無之、草木ニタトヘ候得バ、水草ノ様ナルモノト申聞候。右ハ此通ノ次第ヲ以、長英へ御問合被下候得バ相分リ申候。

一、私病ヲ以テ退役奉願候次第、段々厚キ御思召ニテ有體申上候。御聞分奉願候。先御役願仕候心定ノ是非ヲ考へ候ニ、古人四十二シテ仕へ、七十二シテ致仕仕候事ニ候得バ、御奉公ノ数中、三十年ニ御座候。八歳ヨリ十五歳迄ハ日勤ノ奉公仕、十六歳ヨリ三十三歳迄ハ隔日ニテ、日

勤同様繁多ニ相勤候。其間和田倉御番所へ四年越勤番仕、又候三十七八歳ノ頃、御用人被仰付候。以来又々繁多ニ相成、生レ出候ヨリ四十六歳ノ間、中五六年ナラデハ人並ノ義モ出来不申者ニ御座候。右ノ通り唯粟ヲ食ヒ生テ罷在候ノミニテ御座候」

私の家老（年寄）職の退職の件、先日内々でお願い申し上げたところ、いろいろご懇切なお言葉で思いとどまるように、との書面をいただきました。それで、今一度再考しましたが、近ごろ神経が苛立ち、日夜高ぶって心が落ちつきません。今日も高野長英に相談したところ、今の病状では心気の保養をしなければ、薬を飲んでも効果はない、とのこと。血管はぶよぶよで、筋肉も締まりがなく、草木に例えれば、浮き草のよくな状態だ、との診断でした。こんな私の病状は、長英にじかにお問ひ合わせになれば、わかります。第一に、私が病氣理由で退職願いを申し出た経過について、格別のご厚意で詳しく述べるようにとのこと

です。ので、ありのままに申し上げます。ご理解くださいよう願います。先ずこの退職願書の心底の是非を説明させていただきます。

古人によれば、古人は四十歳で宮仕えをして、七十歳で退職するのが、慣例とのこと。ですから勤続年数は三十年になります。しかし、私

の場合、八歳から十五歳までは毎日勤務し、十六歳から三十二、三歳までは隔日勤務でしたが、日勤同様の多忙な勤務でした。その間に江戸城

和田倉門の番所の番士として、四年越しの勤務も致しました。その上、三十七、八歳の頃には藩の用人の役職を命ぜられ、またまた多忙な生活に戻りました。生まれてから四十六年の間、人並みの生活ができたのは、わずか五、六年しかありませんでした。このように唯俸禄をむさぼって生き永らえてきただけの生涯だったのです。

若干の注釈を加えると、高野長英は、華山の主治医であり、巢鴨の下屋敷に隠居していた三宅友信が隠居

手当で扶持を与えていた。表向き藩の許可を得ていたわけではないが、彼が蘭方医で、診療と翻訳に従事していることは、公然の秘密であった。古人の言い伝えとは、古代中国の四書五経の一つ『礼記』曲礼篇からの引用である。

なお、この記述の後に華山は、紙面の都合で原文を引用できないが、次のような主旨の謙遜・感謝の辞と、退職願の受理を求める切迫した心境を書き加えている。

殿様やご同僚の皆様が、私ごとき者の能力を買いかぶって、格別のご仁憐とご援助を恵与してくださいましたことを、心から感謝申し上げます。前記の通り私は、繁忙な勤務のため犬馬の齢を重ねるばかりで、どんなにご鞭撻を受けましても、鍛錬せずに作った鈍剣のような者です。才能の有無に関わらず骨限りまで酷使された驚馬（歩みののろい馬）同然の私ですから、よくよくの病身になった次第です。お憐れみの上、私の窮状をご理解ください。

渡辺華山『毛武遊記』

(22)

研究会員 加藤克己

天保二年（一八三二）十月二十二日続き

華山たち六人は、足利学校を見学した後、二手に別れた。華山、近江屋忠七、梧庵の三人は、茂木氏の家でそばを御馳走になった後、饒阿寺を参詣して清風楼（角清楼）へ行った。酒宴を始めたところへ、別れていた三人（岡田立助、昌庵、蘭溪）もやって来て（すでに他の酒屋で酔っ払ってきた）、また六人そろった。

かくせる程に予が此地にいたりしを聞、到るもの皆此地の雅士といふ。

魚住勇助、名、榮、字、玉妃、号、雉翳。善、画。山水。又号、背山。

三輪宗琢、名、琢、字、子玉、号、洞水。業、医。好、詩。

近藤舟助、名、濟、字、巨川、号、揖斎。善、書。師、詩仙。

そうこうしているうちに、私がこの地足利に来たことを聞いて、新たに人か集まって来た。皆、この地の風流人という。

魚住勇助、名は榮、字は玉妃、号は雉翳、山水に秀でている。また、背山とも号している。

三輪宗琢、名は琢、字は子玉、号は洞水、医者で、詩が好きである。

近藤舟助、名は濟、字は巨川、号は揖斎、書に優れ、大窪詩仙に師事した。

※ 魚住勇助 以下三人は、いずれも足利の風流人。

※ 近藤舟助 樵香とも号す。華山が蚕社の獄で田原に蟄居中の天保十一年（一八四〇）六月十七日付、江戸の友人に宛てた書簡中に、「舟助子・吉沢氏等数人へ厚御謝奉願候」とあり、華山の晩年まで交際があったことが分かる。

※ 詩仙 大窪詩仙。漢詩人。第13回（36号）参照。

清風楼をくだり、近忠の家にといたる。寓処二いそぐをもて辞帰。数子又ひとしく予客所にいたり、画をもとむ。酔後一掃灑白、何事を作るをしらざる也。紙扇堆然。

清風楼をおりて、近江屋忠七の家へ行く。宿所に帰ることを急いだので、もてなしを断つて帰った。数人がまたそろって私の宿所へやって来て、絵を求めた。酔っ払った後で一気に画筆を走らせたが、その記憶が無くなり、何を書いたか覚えていない。紙や扇がうず高く積みあがっていたことだけ覚えてる。

※ 清風楼をくだり 道が下り坂ということではなく、宴会場が上の階なので、そこから降りてという意味だろう。

※ 寓処 寓所。仮に住む所。仮住まい。ここで

は、宿所の葛屋。

※ 数子 数人。清風楼に集まった人の多くがいつしよに葛屋へ行ったのだろう。何人行ったかはつきりしないが、その夜の記事に近江屋忠七と梧庵が、翌朝の記事に岡田立助、昌庵、蘭溪、三輪宗琢が登場する。魚住勇助と近藤舟助の二人は名前が出ないから、葛屋まではおそらく行かなかったのだろう。

※ ひとしく 斉しく。一斉に。そろって。

※ 一掃 一度にきれいに片づけてしまうこと。

※ 灑 そそぐ。水をまく。

※ 一掃灑白 一気に画筆を走らせたが、その記憶が無くなったこと。

※ 堆然 うず高く積もるさま。

足利学校文庫中所蔵宋版跋。

（図なし、二頁空白）

聖像。

（図なし、二頁空白）

足利学校の文庫中に所蔵されている、宋代に出版された書物の後書き。

（図なし、二頁空白）第19回（42号）にあった『左伝註疏』『周易註疏』『文撰』等の後書きを記す予定で、空白にしてあった。『客坐録』に書かれている。

聖像（孔子像）。

（図なし、二頁空白）『客坐録』に描かれている。第20回（43号）に紹介。

※ 宋版 「宋板」と同じ。宋代の出版。

※ **跋** 書物や書画の巻物の末尾に記す文。後書き。あとがき。

紙を忍がくにもうく、たゞ扇頭画を作る。其かずをしらず。近忠おのが家より看取よせ出す。予一日の酔につかれ、人々のかたはらに酔臥。

紙に描くのが億劫で、もっぱら扇面画を描いた。数え切れないほどたくさん書いた。近江屋忠七が自分の家から看を取り寄せて出した。私は、一日の疲れと酔いのため、人々の（酒宴をしている）傍らで眠ってしまった。

※ **扇頭画** 扇面画。華山は絵の腕前に誇りを持つていたから、紙に描くならば、しっかりと描かなければならないから時間が必要だし、紙を広げて描く場所も必要で、酒の席では描きにくい。扇面画なら、小さな絵で済み、簡単に描ける。

※ **一日の酔** 前夜、華山は岡田東鳩と徹夜で語り明かして、一睡もしていなかった。そして、この日一日精力的に動いた疲れに、酒の酔いが加わった。

梧庵云、予いねしより愈觸おこなはれ、予が画をあらそひしと云。

(図なし、一頁空白)

葛屋楼上図。

(図なし、二頁空白)

(後で) 梧庵が言うには、私が眠った後、ます

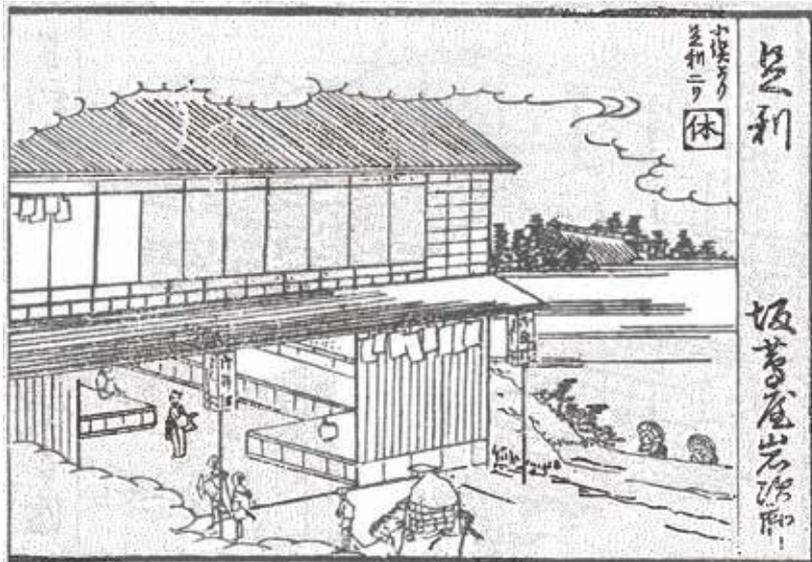
ます皆が酒を飲んで（宴が盛り上がり）、私の絵を取り合ったという。

※ **梧庵云** この文は、一字下げて書いてある。

※ **觴** 杯に酒を注ぐ。酒宴が盛り上がる。

**坂の葛屋**

足利で華山が泊まった宿。青木裕編『根本山参詣ひとり案内』復刻版（みやま文庫 平成十年）より。華山が書いた絵がないので、代わりにこれを載せる。



『根本山参詣ひとり案内』

この案内書は、根本山参詣の最盛期、安政六年（一八五九）に刊行された、江戸日本橋から根本山神社までの道中案内書。往路は華山が江戸から桐生新町へ行ったコース。桐生新町からさらに北上する。復路は桐生新町・境野村（桐生市）から東へ進み、足利を通り、渡良瀬川・利根川を通じて、江戸へ帰る。

根本山は、上野（群馬県）・下野（栃木県）にまたがる山で、神社の位置は下野だが、桐生（上野）側から登る。

華山は、十月十八日、桐生新町二丁目の岩本邸から根本山参詣を計画していたが、雨降りのために中止した。第11回（34号）参照。

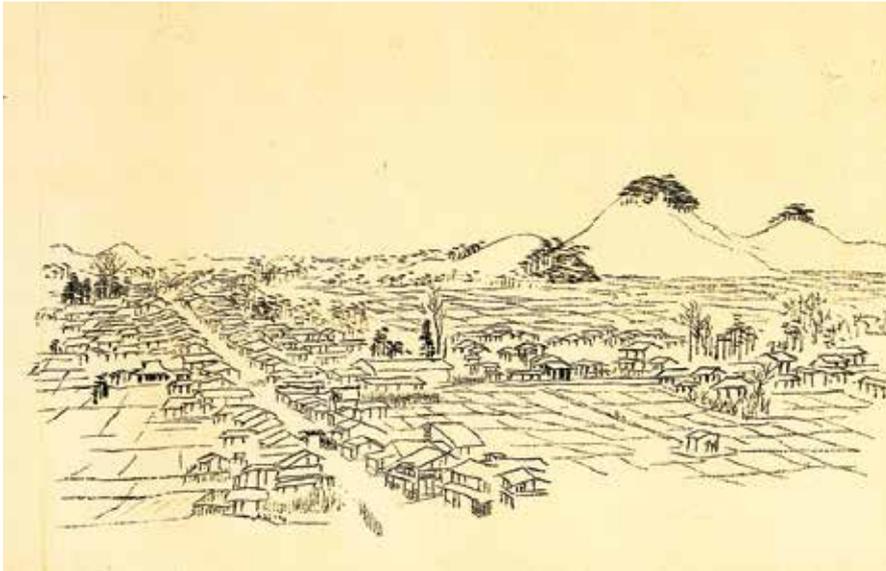
二十三日 晴

宵に人々と大酌して扇頭数柄ヲ画きしと覚えしに、鳥のかいかいと鳴におどろきて、雨戸おしひらき見れば、夜は明たり。人々はよく寐にたれば、ひとり筆とすゞりとを持ち出て、観音山にのぼる。

天保二年（一八三一）十月二十三日 晴

昨夜は大勢の人々と大酒を飲んで、扇面画をいくつか描いたことを覚えているが、鳥がかいかいと鳴く音に驚いて、雨戸を押し開いて外を見ると、夜は明けていた。みんなはぐっすり眠っているの、ひとりで筆とすゞりとを持ち出して、観音山に登った。

※ **観音山** 葛屋の近くにある山。葛屋から見る



毛武遊記図巻 学校法人常葉大学蔵

※ 塚 ビ。「寝」と同じ意味。ねる。

と、旧国道五十号をはさんで北側。少し登ると、足利の町が一望できる、見晴らしの素晴らしい場所がある（桐生の渡辺華山と歩く会代表の岡田幸夫氏のご教示による）。頂上まで登ったわけではない。日の出の遅い冬の朝食前、健脚の華山でも行動可能範囲はごく限られていた。町を写生できる場所はここしかない。



### 足利の街図

上段の街図は、渡辺華山「毛武遊記図巻」より。従来、大間々の街図と考えられていたもの。前出の岡田幸夫氏が、足利の街図であることを発見、華山の描いた場所を特定した。

次に、華山が街図を描いたと思われる場所から見た現況写真を載せる。広角でないので、両横が切れてしまったが。

### 三つの観音山

『毛武遊記』には、三つの観音山が登場する。

- 1 十月十五日 第7回（30号）、桐生市宮本町、光明寺の北。
- 2 十月二十一日 第14回（37号）、桐生市菱町、桐生川の東。
- 3 今回、足利市、鳶屋の近く。

この三つがそれぞれ別の山であることは本文を読めば分かると思うが、間違えないように気をつけたい。

此山は桐生のかたよりいたれば、宿に入んとせる処にて、眺望一郷を見わたさる。人家鱗のごとくならびたちて、かすむばかり。雲静なれば、朝のめしたくけむりはたすじも三十すじも、いはゞしづの女のさらせし布を、梢に掛わたしたらむやうにて、はた山をいづるのからすの五つ六つ、むらがりつ、行さま筆につくしがたし。此地の地勢をうつしとりて、やどりにかえる。

この山は、桐生の方からやってくると、足利の宿場に入ろうとする所にあつて、見晴らしがよくて、足利の一郷全体を見渡せる。人家は鱗のように並び立っていて、霞んでいる。雲（風）が静かなので朝のご飯を炊く煙が二十本も三十本も立ち上がり、言ってみれば身分の低い女が日光に当てて乾かそうとして、布を機の梢に掛け渡したような光景である。傍らの山を出るカラスが五、六羽群がって飛んでいくようすは、絵筆では表せないほど美しい。この土地の高低や山、川の配置など

を書き写して、宿に帰った。

※ **宿に入るとせる処** 華山の記述は、観音山の位置を的確に示している。しかし、従来この記述が軽んじられていた。観音堂があり、現地では観音山と呼ばれていたが、地図にはその名称がなく、観音山の場所が知られなかったのだろう。かつては他の山が想定されていた。

※ **はたすじ** 二十すじ。

※ **しづの女** 賤の女。身分の低い女性。

※ **さらす** 日光・風に当てて干す。

※ **はた山** 端山。山のおち、へり。傍らの山。

岡田立助は予が此日とむらはんとすれば、先だちて帰る。昌庵、蘭溪とひとしく飯終りて出んとす。やどのあるじ紙もち出て画をもとむ。三輪宗琢も又、画をもとむ。さきいそげバ不画。

岡田立助は、私がこの日に訪れようとしているので、(迎える準備のため)先に帰っていた。昌庵、蘭溪は、そろって朝食を終えて、出発しようとしていた。宿の主は、紙を持ち出してきて画を求めた。三輪宗琢もまた、画を求めた。しかし、先を急いでいたので、描かなかった。

※ **昌庵、蘭溪……出んとす** 二人は出かける支度を終えていたが、華山が朝食を済ますのを待って、いつしよに出かけたと思われる。

三輪宗琢を導となし、岡田の家をいたる。道のほど田間を行、又坂を越。木くさ上をおほひ、

この葉は落ちかさなり、歩行に音をなす。豁然かつぜんと打ひらけたる所にいづ。前ハ井の字かきたらんやうに田あり。後はたかき山うちめぐり、松のくろうしげりたる、山腰に門塀のしろう見ゆる、即岡田うじなり。いとよはなれたるわびずまひ、心甚うらやむ。

三輪宗琢を先導者として、岡田の家に着いた。行く道は、田の間を通り、また坂を越える。木や草が生い茂って、落ち葉が重なっており、歩くとき音をたてる。そのうちに目の前がぱつと開けて広々とした所に出た。前は「井」の字を書いたように整然と区画された田がある。後ろは高い山が打ち続いており、松が黒々と茂っている。山の腰に門や塀が白く見える。これが岡田氏の邸宅である。世間から全く隔離した閑寂な住まいで、たいへんうらやましく感じた。

※ **豁然** 景色などが、眼前にぱつと開けるさま。

※ **井の字かきたらんやうに** 整然と区画された田んぼが並んでいるようす。

※ **よはなれたる** 世離れたる。世間から遠ざかった。

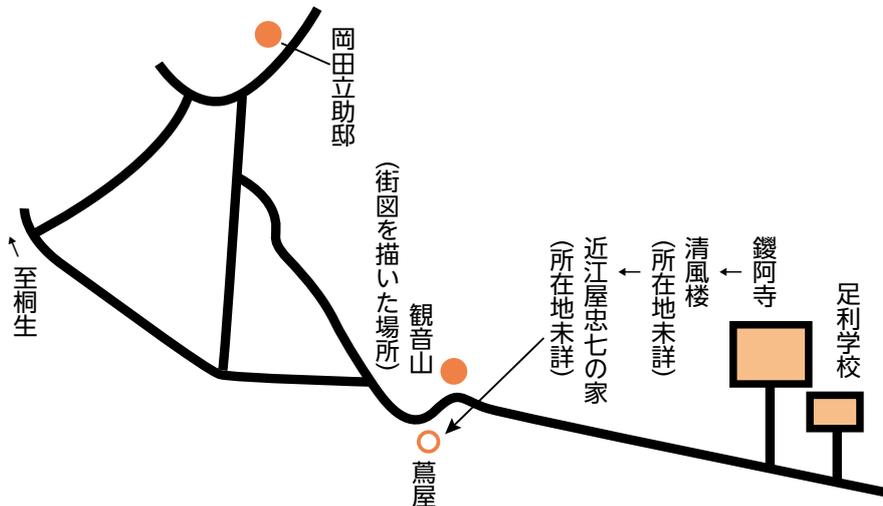
※ **わびずまひ** わび住まい。世間から離れてひっそりと暮らしていること。また、その住居。

※ **心甚うらやむ** 華山は、絵を描いたり、思索をまとめたり、やりたいことがたくさんあった。後に「退役願」を書くように、藩務に追

われるよりも自由時間が欲しかったのだろう。自分もこのように世間から隔離した静かな所で生活できたらいいなという思いにかられた

略図

ことだろう。



岡田東塙山莊図。  
(図なし、二頁空白)

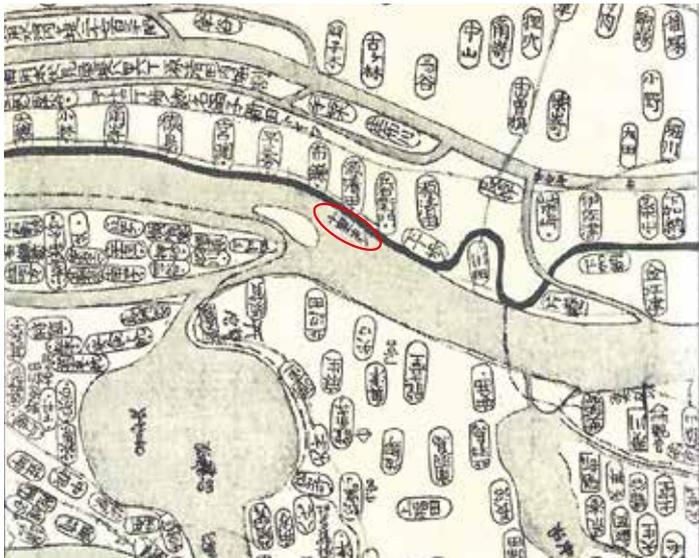
(続)

『四州真景の旅』⑧  
名品「利刀 常州 十里」

研究会員 中神昌秀

一 序

華山は、文政八年（一八二五）夏、利根川下流域を旅し『四州真景図』を制作します。前回は四州真景図の名品「潮来花柳」について書きましたが、今回も、名品の一つ「利刀 常州 十里」を訪ねる旅をしてみたいと思います。



『利根川図誌』 利根川全圖 岩波文庫

二 「利刀 常州 十里」の位置



大字十里位置図

十里付近拡大

十里は常陸国河内郡兵部新田にありました。現在は茨城県稲敷郡河内町大字十里になります。『利根川図誌』の利根川全圖を見ると、印旛沼の対岸に布鎌という村があり、『十里カシ』という記載が見えます。ここが名品「利刀 常州 十里」のモデルとなった場所です。

華山は江戸を出て二日目の旧暦文政八年（一八二五）七月一日、新暦八月一四日には、木下（千葉県印西市）から木下茶船に乗り、津宮（千葉県香取市）に向け利根川を下ります。十里は、木下から約五キロ下流になります。

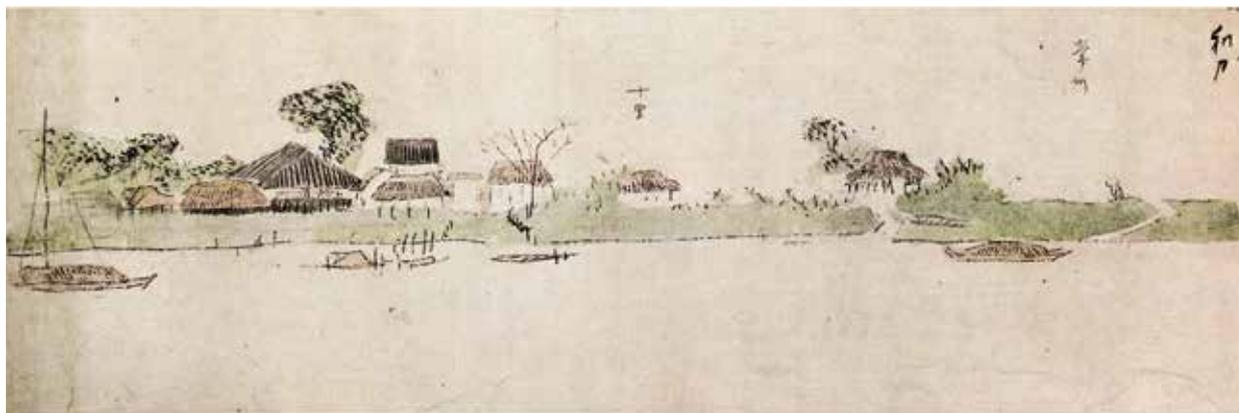
三 真景図「利刀 常州 十里」

四州真景図は、四巻の卷子装（かんすそう）いわゆる巻物の形になっています。傑作「釜原」は二之巻の三図、「利刀 常州 十里」は二之巻の四図になります。二つの図には、名所ではない風景、広々とした自然、図の大きさがほぼ同一という類似点があります。

華山は、盛夏の利根川を下る船の上から見た風景に、心を捉えられたのでしよう。「利刀 常州 十里」という注記が書かれた図となって残っています。当時の利根川沿いでは、ありふれた風景であったと思いますが、華山の感動が見る者にも伝わり、なぜか心に訴えるものがあります。なお、ありふれた風景と書きましたが、この図は、ただ水辺の風景を描いたのではなく、「十里河岸」という小さな舟着き場と集落をテーマにしているものです。

図中の集落の中心は、比較的、画面左、上流側に寄せて描かれています。華山はこの風景に魅せられてしばし眺めた後、舟が十里河岸を通過しようとした時、ふと我に返り、急いで筆をとったのでしょうか。それとも、十里河岸に一旦停泊し、写生したのでしょうか。

利根川の土手には、くの字型に折れた小径や、土手の下から上まで縦一列に並んだ杭が見えます。これにより、土手の傾斜をうまく表現しています。また、左手の集落は一階の屋根より上が土



四州真景図「利刀 常州 十里」重要文化財 紙本墨画淡彩 縦13.5×横40cm 個人蔵

手の上に見え、更はその奥には、屋根より高い三本の木が描かれていて、土手、家、木と重ねて奥行きを出し、平面的になりがちな川の風景に、立体感を表現しています。

土手の右や中央、そして左の平屋は、藁葺屋根なのででしょうか。その質感を巧みに表現した柔らかな、やさしい線です。

利根川は、大河らしいゆったりとした流れです。岸辺は僅かに波打った点線で描かれています。多少の波があつたのかもしれませんが、流れは緩やかで、小舟の向きによって下流の方向が、かろうじてわかる程度です。

利根川の川面、川の中の少し曲がった杭、舳舳した小舟、土手の緑、ひっそり佇む数軒の民家。そこには、世界的大都会であつた江戸とは正反対の、時がゆっくり流れる、自然豊かな別世界が広がっていました。その風景を写し取つた図は、四州真景図の最高傑作と言われる「釜原」と共に、郷愁を誘う、癒しの風景となっています。いや、「釜原」よりも、「利刀 常州 十里」こそが、四州真景図の真髄を体現したものなのかもしれません。

東京大学名誉教授の芳賀徹氏も、この図について、『ごく平凡な利根の風景を、なんの力むところもなくすばやい省筆と淡彩で描きながら、そこにこの文政八年七月某日の午后の一刻の印象の鮮やかさと、その「平凡」さがもちうる奥行きの深さといったものを、みごとにとらえ尽くしている。』と書いています。また、『いま、日本のただ

中に在りながら、なにか日本がなつかしく恋しくてならなくなるような絵、ともいおうか。おそらく、渡辺華山も、利根を下る船中からこの人知れぬ村落の佇まいにふと心をひかれ、そこにこの桃源郷的空間の存在を感じてかきとつたのである』と書いています。

#### 四 終わりに

私が「利刀 常州 十里」を見て連想するのは、色彩の魔術師と呼ばれたフランス人画家、ラウル・デュファイー Raoul Dufy (一八七七～一九五三)が、故郷の港町を描いた「夕暮れ時のル・アーヴルの港」(一九〇〇年 油彩 カンヴァス 七三×六〇cm 仏アヴィニョン市カルヴェ美術館蔵)

*Le Port du Havre au crépuscule* 1900 Huile sur toile 73×63cm Musée Calvet Avignon France  
です。「利刀 常州 十里」の川に対し、ル・アーヴルは海、しかも夕方ですが、その水面がどうしても重なって見えてしまいます。それは、描こうとしているテーマの方向性が同じだったからなのでしょう。それでは、また。

※連載中に、一度紹介した参考文献は紹介を省略しています。

## 「少年物語 渡辺華山」

### 読書感想文について

公益財団法人

華山会では、郷

土の偉人渡辺華

山先生の功績を

後世に伝承する

事業の一環とし

て、毎年市内小

学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子

をプレゼントしてまいりました。感想文の募集

を行ったところ、三九二点の応募をいただき最

終選考において選ばれた二六点の中から優秀賞

五点と囀鳴協議会長賞一点の作品をご紹介します

ていただきます。

応募いただきました学童の皆さんやご協力を

いただきました各学校の先生方に厚くお礼申し

上げます。

公益財団法人華山会事務局



### 周りのために行動している人

童浦小学校 六年 片桐 兜 真

ぼくがこの本を読んでまず思ったことは、渡辺華山は、自分のためより周りのために行動している人だと思いました。

渡辺華山の家はとても貧しかったから、家計を助けるために、昔から才能があった絵の勉強をして画家となって、自分より家族を助けようとしていました。昼寝をするぐらいなら、勉強や仕事をすると行って、必死に勉強したそうです。ぼくが知っている人の中で、一番一生けん命に勉強に取り組んでいる人物だと思います。

ぼくはあまり勉強が好きではないけど、雨の日も風の日も休まず必死に勉強する渡辺華山と同じ様に、好きな陸上を必死にがんばりたいなと思いい、家で体幹トレーニングを始めました。陸上教室は週二回なので、家で続けられることを毎日続けていきたいです。

その後、渡辺華山は四十才で家老になりました。家老は、会社の社長を助ける人のような立派な仕事だとお父さんに教えてもらいました。

日本中が天保のききんで米がとれず、うえ死にする人がたくさんいる中で、田原は一人も死にませんでした。それは、ききんの時に人々を助けるため、たくさんのお米や麦をためておける倉を渡辺華山が造ったからです。蔵の名前は報民倉といいます。

もし渡辺華山が生きていれば、今のこのコロナウイルスの問題に対してどういうふうに関わっていたり

するのか、興味があります。色々なアイデアや人々を想う心で助けてくれそうな気がします。

日本の行く末を心配した渡辺華山は、国の政治を改めてもらいたい目的で慎機論を書いていました。この時代、幕府のやり方を非難することは良くない事と考えられていたそうです。それでも悪いことを悪いとはっきり言うというのはすごいことです。ぼくは、仲良しの友達なら言えますが、年上の人や年下の人には意見が言いにくいのです。これからは、児童会の役員にもなったので、渡辺華山を見習いたいです。

一八四一年、渡辺華山は四十九才の時、物置の中の床の上で、短刀でのどをつらぬき亡くなってしまいました。自分に対するうわさや悪口は平気でしたが、殿様にめいわくをかけるようなうわさが耳に入り、つらかったんだと思います。ここでも、自分のことではなく、人のことを思って行動して欲しいと思います。

ぼくは、今まで自分のやるべきことは自分で決めてやることが多いですが、たまにゲームにつられてしまうことがあります。これからは、昼寝もしない渡辺華山を見習って、勉強や陸上をがんばっていきたいです。

また、六年生として自分のことだけでなく周りを見て、下の学年の子やこの学校全体を、ひっぱっていききたいです。



渡辺華山を読んで

大草小学校 六年 及 部 心 愛

私はこの本を読んで、渡辺華山という人がものすごく努力をして、人のために生きてきた人だと知りました。くらしぶりはお金がなくて、つらい生活だったことにもくじけずに、日々がんばって生きる華山先生の姿に、心の強さを感じました。

私が華山先生についてすごいなと感じたことは、大きく二つあります。まず、小さなころからどんなことに対しても熱心に取り組む心や、なにかあってもゆらくことがない強い意志をもっていたことです。華山先生は、一生けん命勉強をがんばって学問を身に付けていきました。後に、大きくなった華山先生は画家として有名になったり、西洋の文化を学んだりするなどたくさん顔で結果を残していきました。これは、華山先生が小さなころから何事にも手を抜かず、熱心に取り組んできたからだと思います。私は学校の宿題が終わると、勉強ではなく、外で遊んだり、音楽をきいたりするなど好きなことをして過ごしています。しかし、この本を読んで華山先生のように、小さなことでも努力を続けることで、結果を出せるようになるかもしれないと考えることができました。今私が出来そうなことは、宿題が終わった後に、自分で問題を解いたり、漢字の練習を自主的に行ったりしていくことです。これからは、自分の好きなことだけやるのではなく、勉強やほかのことにも前向きに継続した取り組みができるようにしていきたいです。

また、華山先生は常に、自分のことよりも周りの人の事を考えて行動していたことにもすごいと思いました。画家になって、絵を売り始めた理由も

家族を救うためでした。さらに、自分の家が貧しくて大変なはずなのに、助けた相手のお礼をもらおうとはしませんでした。すごく優しい心の持ち主だと感じました。私も華山先生のように、困っている人には優しく声をかけ、助けてあげられるような人になりたいです。

最後に、華山先生の生きていた時代は、今と違って生活が苦しくなると、兄弟がはなればなれになつてしまうことや、その後二度と会えなくなつてしまふことがある時代でした。生きていくためにはしょうがないことだとしても、これはものすごくつらいことだと思えます。私にも弟や妹がいますが、もし同じ時代に生きていて、はなればなれになると思うと悲しくなります。今、自分がこうして家族みんなで過ごすことができていることがとても幸せなことだと改めて実感しました。当たり前に過ごしている毎日が、昔の人からすると、幸せなことだと知り、これからは毎日大切に過ごしていきたいと思えました。

華山先生の本を読んで、努力を続けることの大切さ、つらくてもめげずにがんばる心、周りの人ややさしくする心、当たり前の毎日が幸せだということなど、たくさん学ばれました。人のためになる生き方は難しいことかもしれませんが、「周りの人のために自分ができることはなんだろう」と考え、行動できるようにしていきたいです。

華山先生から学んだこと

田原中部小学校 六年 木村 未来

私が華山のことを初めて知ったのは、田原中部

小学校に入学した一年生の時でした。それまで、何気なく遊びに行っていた池ノ原公園や、小学校に建っていた銅像。その銅像が華山先生だと知ったのは、後のことでした。そして、一年生の学芸会で初めて観た華山劇その歴史はよく分からなかったのに、悲しくて複雑な気持ちになったことをよく覚えています。私たちが育っているこの田原という土地に、ずっとずっと昔生きていた華山先生のことを、もっと知りたいと思いました。

私がとても印象に残っているのは、華山劇でも紹介されている話です。華山先生の家は、お父さんが病気がちで治りように多くのお金がかかり、極度に貧しかったので、日々の食べ物にも困っていました。そんな厳しい生活の中でも、華山先生は一生けん命勉強し、絵の修行をしながら家族を助けていました。さらに、弟や妹たちが次々に奉公に出されてお別れすることになりました。

私にも弟と妹がいます。ささいなことでもけんかをします。夜になると家族もみんなそろろうし、当たり前のように話したり笑ったりしながら食事を楽しみます。そして、自分の好きな時間に寝ることもできます。しかし、私が思っている当たり前は、華山先生が生きていた時代では、全然当たり前ではないと気付きました。昔を想像すると、悲しくなってきました。弟や妹とはなればなれになるなんて考えられないし、家族の生活を支えるなんてできません。それだけ華山先生はすごい人だったんだと思いました。

華山先生は、絵の才能がみとめられ、二十代半ばには画家として有名になりました。だんだん生活に苦労せずすむようになってきましたが、四十七才のころ、蛮社の獄が起きました。幕府に口を出す不届き者として、池ノ原やしきできんしん生活を送ることになり、藩にめいわくがかかることをおそれ

た華山先生は、切腹してしまいました。それを聞いて私は、あのころ見た池ノ原公園の銅像が目にくらんできました。

華山先生は、どんな状況のように置かれても、いつも大切な人やみんなを思って行動していました。その華山先生の思いは、華山劇などを通して今にも受けつがれています。私たちも同じだと思います。どう考えて、どう行動していくかによって、ずっとずっと先の世界が変わるかもしれないと思うと、背筋がびしょと伸びたような気がしました。この令和という時代は、華山先生が願っていた世界になっているのでしょうか。華山先生の生き方から学んだことを胸に、みんなのために真つすぐ生活していこうと思います。

## 努力のきっかけ

若戸小学校 六年 横 田 伶 望

私は、今まで生きてきて、絵を描くのが好きだと思ったり、バスケットボールが楽しい、面白いと思ったりすることがありました。しかし、そのように思うだけで、もつと努力しようと行動に移したことはありません。それらのことについて詳しく調べよう、とすることもありません。それらのことに使う時間をもつたいたいと思っしまいました、やろうとせず、すぐにやめてしまいます。これらのことからわかるように、私は今まで生きてきて、特に努力をしてきませんでした。だから、いつも母から、

「努力をしないから、みんなに追い越されて置いて行かれていくんだよ。」  
と言われてきました。一つのこと熱心な人と

私はちがうと思いつながら、自分はどうして努力ができないのだろうと、考えることがありません。

渡辺華山先生は私とちがいが、がんばると決めたことは一生けん命がんばれる根性、そして精神をもつていて、すばらしい人物だと思いました。華山先生は貧しい家での生活でも、自分が描く絵でがんばって家族を養おうとしました。さらに、華山先生の発案により報民倉を作るときには、華山先生のために、人々が力を合わせたそうです。華山先生の何事にもがんばる姿勢が、人々の心に伝わったのだと思います。これほどまで、人々に信頼されていて、人々に影きようを与えられる人を、私は今まで聞いたことも見たこともありません。また、華山先生が自害した際に書かれていた遺書の内容にもおどろきました。私なら、今まで反発してきた人や、見下してきた人に文句や怒りの言葉を書きます。しかし、内容は全くちがうものでした。遺書からは、母や妻子に対する温かい心遣いがにじみ出ている、家族に対する細やかな愛情が表れていたことです。無実の罪で罪人とされてしまったことや、死ななければならなくなったことについては書いてありませんでした。人をにくみ、世をうらむ言葉さえありませんでした。努力してきたことを否定され、しかも罪人とされてしまえば、私ならとても怒れることであり、遺書には不満をたくさん書くと思います。けれども、このようなことをしない華山先生には、心が広く愛に満ちたすばらしい姿がありました。

私は、華山先生は何か一つのこと集中するのに、時間や努力をおしまないすごい努力家だと知りました。人々にも信頼され、心も広く、

とてもすてきな人だとも思いました。華山先生がこのようなすてきな人だと知り、今の私では、華山先生のようににはなれないと思いました。けれど、好きだと思ったこと面白いと思っただけには、すぐに行動に移して挑戦したり、詳しく調べたりしていこうと思います。この本を、私なりの努力をこれからしていくきっかけにしたいです。

## 令和の未来に向かって

田原中部小学校 六年 岩 崎 朱 倫

ぼくは「少年物語渡辺華山」を読んで、華山先生の偉大さに改めて気付きました。

華山先生は、約束を守り、何事にも熱心に向き合っていました。華山先生が「虎之助」という名前だった頃、田原藩殿様のあとの亀吉の友達になるよう、大勢の子供の中から選ばれました。虎之助が普段からおとなしく、正直であるということが認められたからです。虎之助の家は貧しくて、傘を買ってもらったこともできませんでした。なので雨の日に亀吉のところへ通うときにはお父さんのみのかさをつけ、どんな時でも決してつとめを休むことはありませんでした。また、勉強をしながらご飯をたき、一枚しかない着物をこがしてしまふことがありました。勉強熱心だったことがよくわかります。子供の頃から一生懸命勉強をし、約束を守るところが本当にすごいなと思いました。ぼくは上手いかないとあきらめてしまうことがあります。これからは、いろいろな約束や目標を達成するために、一つのやり方が無理なら他のやり方を探すなど工夫し、

華山先生のようにあきらめず最後までやりとげた  
 と思います。

華山先生はたくさん苦勞を乗り越えてきました。ほくが特に心に残っているのは、田原中部小学校の華山劇で演じている「板橋の別れ」です。華山先生一家はたいへん貧しく、一人の娘は女中奉公に出され、七才の留之助はお寺へ奉公に出されました。「板橋の別れ」は九才の熊次郎をお寺へ奉公に出すため、兄弟が別れる話です。この時代は、奉公に出すと二度と会うことができませんでした。華山先生もすごく辛かったと思いますが、「難儀なこと、悲しいことに会うたび、ふるい立って必ずりっぱな人になり、家の人を幸せにしよう」と思っていたそうです。ほくはこの劇を見るたびに、胸が苦しくなるのと同時に、辛い経験を乗り越え、家族のためがんばる華山先生は偉大だと思います。

華山先生は、貧しくても周りの人が支えてくれ、たゆまない努力をしてりっぱな武士になりました。華山先生は本も買えず、先生や友達に借りてそれを写すことしかできませんでした。華山先生が子供の頃、金子金陵先生が努力する華山先生に心を打たれ、熱心に勉強を教えるだけでなく、時々紙や筆などを与え華山先生を励まし続けました。ほくも、がんばっている人を見ると自然に応援をしたり、支えたり、力になったりしたくなります。これからの未来が、権力に左右されるのではなく、がんばっている人や努力している人がもっと認められ、輝ける場所が増えるといいなと思います。

華山先生が亡くなって百七十年以上がたちました。今でも華山先生の熱い想いはたくさん人の心に受けつがれています。ほくも努力することを忘れず、令和の未来を支えるりっぱな大人になりたいです。



嚶鳴協議会長賞

「少年物語 渡辺華山」を読んで

神戸小学校 六年 川口 淳誠

華山先生のすごいと思ったことは四つあります。一つ目は、家族を大切にしたことです。理由は貧しい家を救うために絵の勉強をし、その絵を売り、家族を救いたいと思っていたからです。自分のことより他の人を優先することはすごいと思います。

二つ目は、人のせいにならないことです。理由は、紀州藩の荷物が渥美半島の表浜海岸へ打ちよせられた時、海岸の人たちがそれを拾って家に持ち帰りました。その時の紀州藩は徳川御三家の一つで勢力がとて強かったのです。へたをしようと、ろう屋に入れられるか、打ち首になってしまいます。それでも華山先生は、紀州藩にわけを話にいたり、幕府に申しひらきをしに行ったりして、内々にすますことができました。それはすごいことだと思います。それと、華山先生が自殺した時の遺書にも、人をいんだり世をうらんだりすることは書いていませんでした。ほくもそれを見習いたいです。

三つ目は、人にやさしいことです。人々がききんで苦しんでいる時も、華山先生はそれに同情し、手伝いをしました。家が貧しかったので、華山先生は、その気持ちが分かっていたと思います。それを行動にうつせる華山先生を見てほくは、すごく立派な人だと思います。

四つ目は、絵をかき続けたことです。家にいる時から田原にかごで送られていく時まで書き続けたのです。自分の好きなことをずっと続けるという

ことは、よっぽどそのことが好きではないとできないことだと思います。

ほくがこの本を読んで学んだことは、人に対する心づかいです。華山先生は人に対して決してえらそうな言葉を使っていません。それは人に対してのやさしさだと思います。それと、人を決してにくだりしないことです。華山先生が亡くなった時の遺書には、人をにくんだり、世の中をうらむようなこととはせず、全て自分の責任ということが書かれました。ほくはそれに感動しました。華山先生を見習い、これからの人生に向けて、人をにくんだり、世の中をうらむのではなく、人にやさしくし、みんなから、大切な存在と思われるような人間になりたいです。それと、困っている人がいたら、その人に同情して、たくさんの人を助けてあげたいです。

最終選考に選ばれた方々

- |        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 鈴木 琉也  | 大岩 紗弥  | 原 歩菜   |
| 糟谷 向日葵 | 小久保 湧斗 | 内藤 律   |
| 高橋 由芽  | 刑部 陽菜  | 片山 歌菜  |
| 山田 莉緒  | 河合 七菜子 | 小久保 桜空 |
| 伊藤 晴香  | 光部 成美  | 山本 華里那 |
| 川口 穂乃夏 | 鬼頭 駈   | 小久保 紗耶 |
| 伊藤 綺華  | 神谷 咲苗  |        |

(受賞された方は除く)



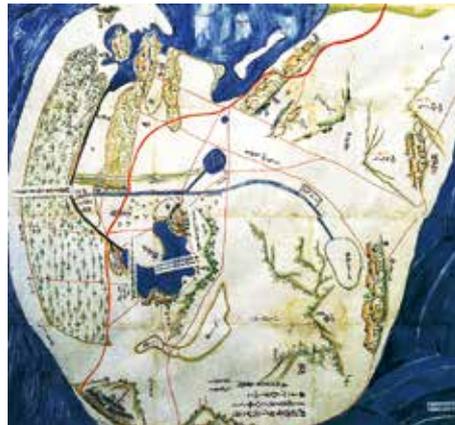
公益財団法人華山会  
田原市博物館  
田原市渥美郷土資料館  
からご案内

田原市博物館企画展のご案内

十月三日(土)～十一月二十九日(日)

ふるさとの歴史 渥美半島2万年の歴史を探访する (企画展示室)

渥美半島に人が住むようになって二万年。先人たちの営みのなかから、十三のテーマを設定し、渥美半島の歴史の一コマを紹介します。



※亀山村古絵図写 (江戸時代)

展示解説 十一月二十一日(土)午後一時三十分(要事前予約) 華山会館会議室 講師:学芸員 木村洋介

同時開催:重要文化財 渡辺華山関係資料(特別展示室)  
自刃の刀、獄中で描いたスケッチをはじめとする重要文化財を限定展示。

田原市博物館平常展のご案内

十二月五日(土)～令和三年二月七日(日)

渥美半島と文学 児童文学作家 山田もと (企画展示室二)

田原市の児童文学作家である山田もとの生誕百年を記念し、代表作である「水の歌」の原稿をはじめ、田原区が発刊した「蔵王」に掲載された田原の民話の原稿などを展示します。

記念行事 もとばあちゃんが残したたはらの民話 十二月二十日(日)午後一時三十分 田原文化会館多目的ホール 講演会、成章高校演劇部による朗読、大草小学校児童による演劇、座談会など(要予約・十一月十四日から受付)。

高林コレクションに見る文人画 関東と関西(特別展示室)  
高林コレクションは高林泰虎氏の南画のコレクションです。谷文晁筆「千山万水図」や渡辺華山のスケッチである「客坐掌記」(天保3年)をはじめ貴重な作品を収蔵しています。

した。このコレクションを関東関西の作家に分けて展示します。

二月十一日(木祝)～四月十一日(日)

ひな人形と初風展 (企画展示室二)  
田原の旧家に伝わったひな人形や田原風保存会作成の初風を展示。

同時開催:華椿系の系譜 椿椿山 渡辺小華 (特別展示室)

華山が一番信頼をおいていた弟子の椿椿山は花鳥画を得意とし、華山の息子である小華は椿山に師事し、草蟲花卉を得意としました。師弟二人の作品を中心に展示します。

渥美郷土資料館企画展のご案内

二月二日(火)～三月十四日(日) 第35回ひな祭り展 (企画展示室)

江戸時代から現代までのひな人形の変遷を展示。

観覧料

企画展 一般 四〇〇円(三二〇円)  
平常展 一般 三〇〇円(二四〇円)  
小中学生 一五〇円(一二〇円)

企画展開催時は小中学生無料  
毎週土曜日は小中高生無料  
(一)内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポートもご利用ください。(提示により無料入館)  
渥美郷土資料館は無料

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌平日)、展示替日、十二月二十八日～一月四日

華山会報 第四十五号  
令和二年十一月十一日発行  
編集発行 公益財団法人華山会  
理事長 鈴木 愿  
常務理事 林 勇夫  
事務局長 大根義久  
〒四四一―三四二一  
愛知県田原市田原町巴江一二の一  
TEL〇五三二・二二・一七〇〇  
FAX〇五三二・二二・一七〇一

編集協力 田原市博物館  
華山・史学研究会  
会長 小林一弘

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。  
次回発行予定 令和三年四月十一日